

SCP—???—jp 『鳥の王
国』

アールド・レナウス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SCPとコトブキを混ぜてみた二次創作です。

知識ガバガバだけどゆるして。

それと本作は謎の超技術が登場する予定だけどそこは財団驚異のメカニズムってことになっておいてね。

目次

第1話	1
ヘルダイバー	9
突入開始	14
レッドランド	19
R o t t e n b o i l e d e g g	23
レッドカラーとホワイトカラー	27
開拓の残渣	33

第1話

気が付くと、自分はいつの間にか暗闇の中にポツンと立っていた。

ここがどこか分からず、辺りを見渡しても先の見えない闇が続いているだけ。

施設が停電でも起こしたのかと思ったが、あまりにも広すぎる空間にいたので少なくともここは俺がブチ込まれていた房ではないらしい。

不安を募らせる中、出口を探して歩き続けていると、途端に右手に違和感を覚えた。

右手に何かが握られている。何だろうか？

ゆっくりと視線を右手にやると、持っていたのは一丁の回転式拳銃だった。

トリガーに指が掛かっていたので直ぐに外し、念の為シリンドラーを出して残弾を見る。

プライマー^{雷管}が凹んでいるのが三つあった。

つまりこの拳銃は六発のうち三発は消費している。

どこでその三発を消費していたのかと疑問に思っていると今度は足音から何か、水音が聞こえてきた。

拳銃から目を離し、下を見るとそこには死体が仰向けに倒れていた。

女性の死体だった。

頭と胸から大量の血を流して血溜まりが俺の足元にまで達している。

その女性を俺は知っていた。

というより嘗て俺の愛人だった女だ。

死体を見た俺はこの非現実的な光景に一つの結論を見出す。

これは夢だ。

夢から覚める方法は知らないが今できる最善の手段を選んだ。

拳銃のハンマーを引き起こし、銃口をこめかみに当て、そして引き金を引く。

夢の中なので特に抵抗感を感じなかった。

そうすれば、いとも簡単に目を覚ます事ができ、いつもの狭い独房の壁と扉を目に収めた。

「……朝か」

ちようど俺が起きたタイミングで起床の時間になり、独房の明かりが点いた。

自分の腹時計に拠ればあと30分で朝食が配られる筈だ。

それまで待つとしよう。

暫く待っていると、本当に自分の予想通りのタイミングでノック音と共に扉の下に付いている小さな穴から食事の乗ったトレーが入ってきた。

それを無言で受け取り、独房の一人用の机で食べる。

味は財団謹製なので味は保証する。

正直窓の無い独房は中々辛い、食事は毎回結構豪華なので特に不満は無い。

しかもデザートまで付いてくるといふオマケ付きだ。

この閉鎖空間に慣れれば普通の刑務所より過ごしやすいかもしれない。

施設もかなり綺麗だし。

「今日はパンケーキか」

トレイの右端にあった一切れのパンケーキを手に取り、一緒に置かれていた市販の小さな袋に入ったブルーベリージャムを付けて食べる。

一切れなので直ぐに食べ終わってしまったが朝食としては満足だ。

食べ終わってからまた暫く待つと本日二度目のノック音が聞こえた。

トレイの回収に来たのだろう。

予想通り扉の下の穴が空いたのでそこにトレイを入れる。

すると向こう側から手が伸びて来てトレイを受け取り、ワゴンカーが去っていった。

食べ終わった俺は命令が来るまでベッドに寝そべり、時間を潰す事にした。

俺はまだここに來てから間も無い。

だからどんな仕事をさせられるのかは知らないし、そもそもSCP財団なんて組織は

刑務所からここに入れられて初めて知った。

説明に拠ると財団から与えられた業務をこなせば死刑囚でも釈放されるんだとか。財団とやりにそこまでの権利があるのかは疑わしいがそう言われてしまった以上、頑張るしかない。

ここに収容されている奴らは全員Dクラス職員という肩書を与えられている。

しかもかなりの数のDクラスを財団は収容しているようだ。

それともう一つ、分かったことがある。

ここは明らかに異常な施設だという事だ。

前に俺がある朝今のように時間を潰していると突然外から悲鳴が聞こえて来た。

何事かと扉に耳を当てるとどうやらその悲鳴を上げたのはここからすぐ近くの独房にいるDクラスのような奴だった。

聞き耳を立てていると多分警備員とそのDクラスが揉めていた。

「嫌だ!!もうあんな所に行きたくない!!助けてくれえ!!」

「チツ……面倒な奴だ」

その後、あのDクラスは逃げようとしたらしく、銃声が聞こえたので恐らく射殺されたのだろう。

あれ以来、独房の中での警戒心が強くなった。

俺もあの男のように発狂するのだろうか。

ここでの仕事とは一体何なのか。

それすら知らされずにここに閉じ込められているのだ。

警戒心も強くなる。

そもそも、SCPとは何なんだ……。

その時、扉が突然開き、二名の武装した警備員が独房に入ってきた。

「D-26283、仕事だ。 出ろ」

大人しく独房から出て警備員に着いていく。

警備員の後を追っていると、エレベーターの中に入り、上へ上がった。

こここの階層は地下にあるので上に上がるということは地上に行くという事だ。

警備員達の談笑を聞き流しながら、上の階で止まったエレベーターから降りると、か

なり開けた場所に出た。

それから更にもつと進むと小さな建物の前で止まった。

何をされるのかと考えていると先頭にいた警備員の一人が俺に一枚の紙を手渡した。

字がぎつしりと敷き詰められている。

何かの書類のようだ。

読もうとすると警備員がそれを止め、目の前にある建物を指さした。

「それはこの待機室に入ってから読め。仕事の詳細はそこに書かれてる」

警備員が建物の扉を開け、そこに入ると扉が閉まり、鍵の閉まる音が聞こえた。

建物に入るなり、目に入ったのはかなりの数の人だ。

皆同じオレンジ色の服を着ているのでDクラスだろう。

ざっと四十人はいた。

「おう、やっと最後が来たか」

声の掛けられた方を見ると無精髭を生やした中年の男がこつちに手招きをしていた。

どうやらあそこの隣の席に座れということらしい。

その通りに座ると、唐突に自己紹介が始まった。

「英語は分かるか？」

「ああ」

「なら大丈夫だな。俺はヘンリー・ベルクス、元RAF王立空軍所属の戦闘機パイロットだ。

因みに階級は中尉、お前は？」

「アルノフだ。元ロシア航空宇宙軍所属のお前と同じ戦闘機パイロット。階級は少

佐」

階級を口にした途端ヘンリーが目を見開いた。

「少佐かよ！かなり出世してんな。だけど苗字は？」

「無い。産まれて直ぐに親に捨てられた孤児だったからな」

「ああ……そりゃ悪い事を聞いちまったな」

「いいんだよ、別に。今は別にそんな事気にしてないしな」

背もたれに背を預けながら机に放っていた紙を手に取り、中身を確認する。

書かれていることを脳内で簡単に纏めるところだ。

まず、支給された飛行服に着替え、今回の作戦で使用する母艦に搭乗する。

チームの指揮をする母艦の艦長はヘルフリート・レヴニールが務める。

その後、職員からの合図あるまで待機。

合図後、速やかに浮上し、発生した空間領域を通過する。

通過した後、その先の土地の調査、そして空間領域が発生する度に報告書を送れ。

……との事だ。

正直あまりにも長つたらしいので要点以外は大分省略している。

「お前もそれ見ててよく分からんだろ。ここにいる全員似たような反応だったよ」

「ああ、何が何だかさッパリだ」

「まあ、ここにもうすぐ来る職員が説明してくれるそうだから……つて噂をすればなん

とやら、だな」

扉が開かれそこに入ってきた職員を見ながらヘンリーは呟くように言った。

「これより、本作戦の概要を説明する」

ヘルダイバー

「……以上で作戦概要の説明は終わりだ。各自支給された飛行服を着用し、外に出ろ」

そう言い残して職員は去った。

俺達の手元にあるのは一着の飛行服。

これを着て外に出ろということらしい。

よく見るとそれぞれサイズが違うのでちゃんと体格に合わせてあるようだ。

「な、なあ、さっきの話理解出来たか？」

「いや、どういう事だかさッパリだ」

「だよなあ」

あの説明を聞いた彼等の反応といえば、困惑の二文字に尽きる。

例え理屈で理解出来ても納得は出来ないだろう。

それほどに作戦内容は現実性が皆無だった。

俺なんかまだ夢の中にいるのかと思っただけだ。

でもまあ、職員が最後に作戦を簡潔に説明してくれたのでそれを纏めると……

①今から飛行船に乗って丸い穴みたいな空間領域に突っ込んでもらうよ。

② 君達は向こうの世界で空賊を名乗って活動してね。

③ こちらからエージェントと研究員を送るから一緒にオブジェクトの調査よろぴく。

④ 向こうの敵対勢力と出会った場合は君達戦闘機隊に戦ってもらうからね。

⑤ 情報が欲しいからなるべくSCP―??―|j p―Bとは積極的に接触してね。でも財団は名乗っちゃダメだよ。

⑥ あそこには基本的にレシプロ戦闘機しか存在しないから怪しまれない為にも君達にはレシプロ戦闘機に乗ってもらうよ。ラプター？ ダメダメ。

⑦ 二ヶ月に一度穴を再発生させるからそれを通じて報告書を送信してもらうよ。

⑧ 最後に、君達に何かあった場合、次の調査隊を派遣して一ヶ月以内に救出出来なかったら死んだと判断してほっぽり出すからそこそこよろしく。

少し雑っぽいがまあ内容はこんな感じだった。

聞けば空賊という肩書の方があちらでは自由に動きやすいらしい。

だがやはり賊を名乗っているだけあって敵は多いからリスクはその分高い。

そして俺達が今から乗ろうとしている飛行船だが……

「なんだこりゃあ……」

「これが飛行船……だと？」

「まるで山一つが空飛んでるみてえだ……」

目の前に佇む巨船は目測で全長800m以上、高さも200mはありそうだ。ヘンリーが言った通り正に空飛ぶ山である。

その後部ハッチが開き、そこから俺達は船内へと入って行く。

それと同時に、武装した何百人もの兵士も一緒に入る。

「財団から派遣された陸戦隊か」

彼等の装備もハイテクな現代兵器ではなく、旧時代の古臭い武器に装備を身に纏っている。

あれも怪しまれない為なのだろうか……。

「馬鹿言え、督戦隊に決まってるだろう」

アイツらは陸戦隊という名目だが、恐らくは俺達の反乱を抑止する為の部隊だ。

作戦中は常に後ろからアイツらに銃口を向けられる事になるだろう。

列を成して船に入り込むその群れを見ながら、予測出来ない今後の展開に溜息をついた。

◇◆◆◆◆

また、二度目の送迎をするとは。

飛行船に乗り込む彼等の姿を見ながら私は俯いた。

今回は何人死ぬのだろうか。

いや、そもそも生きて帰れるのか。

帰る確証も無い彼等に対して、私は行ってこいと手を振るべきなのか、それとも目を背けるべきなのか。

自分でもその答えは見つからない。

「博士、時間です」

「ん？ あ、ああ。では、始めよう」

目の前にある金属の箱。

正確にはこれは立派な財団の保有するオブジェクトだが、これが今私の手元にある事に今更ながら若干の恐怖を覚えた。

旧式の無線機にも見えるその機械のスイッチを上へ上げ、電源を入れた。

微小な振動とともにランプが点灯した。

このオブジェクトが起動した証だ。

次にトランシーバーを手に取り、測定班に確認を取る。

「測定班、用意は出来ているか」

《はい、カント計数機の用意出来ました》

よし、ならば後は飛行船が予定の高度まで上がるのを待つだけだ。

飛び立った飛行船は徐々に高度を上げ、予定の高度に到達するまであと僅かにまで来

た。

ここで遂に私はこの装置の中心にあるボタンを押した。

これがあの空間領域を発生させるスイッチだ。

たったボタン一つで現実を改変し、時空を捻じ曲げ、世界と世界を繋げられるのだから尚恐ろしい。

その後、直ぐに再びトランシーバーで測定班と連絡を取る。

「測定班！ヒューム値の状況は？」

《ヒューム濃度に変動有り！！ヒューム値、現在30！！尚も上昇中！！》

現実改変によるものか、地揺れが発生し、一回目の時にも聞いたあのけたたましい重低音が鳴り響いた。

耳が痛くなるほどの爆音に耳を塞ぎつつも空を見上げ、空間領域の存在を確認する。

「空間領域が発生した……！ 測定班！直ちに退避しろ！」

《了解！》

穴が消えるまでの間、爆音と地揺れが続き足元が不安定な中で穴の奥へと入って行く飛行船を見送った。

その巨体を見ると、とてつもない頼もしさを感じた。

「二度目は……死んでくれるなよ」

突入開始

飛行船の下部にある艦橋。

そこに集められた俺達は改めて顔を合わせる事になった。

船体自体が大きいのもあってやはり艦橋もかなり広く造られていた。

艦長の席に操舵輪、対空レーダー探知機、艦の心臓部としての機能は粗方揃っていた。

「凄いな……」

「まるでSF映画だ」

スペックを見せてもらったが、こいつは最早飛行船などではない。

飛行船のガワを被った原子力空母とイージス艦をごちゃ混ぜにした何かだ。

飛行船の動力には核融合炉とかいうトンデモエンジンを積んでおり、素晴らしい航続距離と速度性能を両立していると仕様書には書かれている。

そして驚くべきはその速度である。

この飛行船は直線で最大まで加速した場合、なんと約130ノットで進む事が出来るのだ。

しかも戦闘機の搭載機数も凄まじく、俺達の分の40機だけでなく予備機に更に20

機格納出来る。

その船体の大きさを活かし、飛行甲板は上下に二つずつ、計四つある。それだけじゃない、武装もバケモノ級に仕上がっている。

主武装はこのような感じだ。

36cm三連装無反動砲×24

26cm30連装対艦ロケット×36

対空兵装に20mmと40mmの連装対空機銃×96

これだけ見れば如何にこの飛行船がイカれているか分かるだろう。

財団がヘッジホッグと名付けたのも頷ける。

こんなのどう足掻いても勝てそうにない。

第一回目の派遣では流石にここまで物は用意せず、硬式飛行船を少し大きくしたよ
うな物で行かせたらしい。

そうしたらコテンパンにやられたからこうなつたと……。

技術者と上層部の連中……少しムキになつてないか？

というかあんなものをいとも容易く作れる財団は一体何者なんだ……。

そうか、変態か！

紛うことなき変態だ！そうに違いない！！



作戦開始早々、俺達はとんでもない爆音に耐えていた。

実際はオブジェクト起動による現実改変が原因だが、そんな事を知る由もない彼等は訳も分からぬ理不尽な Ear rape に苦しめられる。

「うーっ！おっ！おっ！おっ！おっ！！耳がっ！耳がっ！！」

「鼓膜破れるうう！！」

「ンアーツ！！」

その後音が止んだが耳鳴りのせいで音が止んだのかも分からない俺達は何とか立ち上がって窓際にもたれ掛かる。

すると外の様子を見たヘンリーが声を上げた。

「お、おい見ろー！」

「何だあれは!?」

「空に……穴!?」

空にぼつかりと開いた巨大な穴。

その大きさはこのヘッジホッグを軽く飲み込んでしまうほど。

パイロット達は忽ち大騒ぎしだし、俺も確かな危機感を感じていた。

この飛行船は事前に航路をコンピュータに打ち込んで設定してある。

そしてその進路は……あの穴のド真ん中だ。

「まさかあれが例の空間領域か？」

「そんな事言ってる場合か！このままじゃ突っ込んでしまうぞ！」

「なんだ、英国人というのはただの黒い未知の物体を見ただけで怖気付くのか？」

言い合っている間にも穴との距離は近付き、遂に艦橋の窓は黒に覆い尽くされた。

既に船首は穴に沈み込んでいる。

艦橋が飲み込まれるのも時間の問題だ。

生涯で経験した事の無い異常に流石に冷や汗が出てきた。

穴はとうとうヘッジホッグの三分の一を飲み込み、遂に艦橋まで達した。

「うわあぁッ!!」

艦橋の明かりを点けていなかったため、一瞬にして船内は暗闇に支配され、パニックを起す奴らも現れた。

そしてそんな状況の中唐突に艦橋の扉が開き、誰かが入って来た。

黒と白で統一された軍服とトレンチコート、制帽という如何にも軍人らしい印象的な

見た目をしていた。

顔的に四十代後半といった所だろうか。

皺の寄せた顔もあってか更に軍人らしさを醸し出している。

その男はズカズカと艦橋に歩み入り、堂々と艦長席の前に立ち、そして言い放った。
「私は艦長のヘルフリート・レヴニールである！ 貴様ら、さっさと艦橋の明かりを点ける
！」

レッドランド

艦橋に鳴り響いた一人の男の声によつてパニックは収まつたが、代わりにここにいる全員が奇異の視線をこれでもかと思はれ彼に向けて浴びせていた。

彼は自分の名をヘルフリート・レヴニールと名乗つた。

確かヘッジホッグの艦長の名前も同じ。

「何をしている、早く明かりを点けろ。こつちも暗くてはまともに話も出来ん」

つまりこの人がヘッジホッグの艦長であり、俺達の指揮官だ。

ヘルフリートの催促に誰かが艦橋の照明のスイッチを押しに行つた。

今はそれが最善そうなのでありがたい。

漸く艦橋が照明で明るくなり、俺達もある程度落ち着きを取り戻した。

そしてヘルフリートに目を移すと彼は艦長席から離れ、階段を降りて俺達の目の前まで来た。

いきなり目の前に歩みよつてきたのでそれに圧倒されて後ずさる奴が何人かいた。

軍人然とした風格に皆が緊張を抱く中、ヘルフリートは一呼吸置いて話し始めた。

「改めて自己紹介といつこう。私はヘルフリート・レヴニール。元ドイツ連邦空軍所

属のパイロットで階級は大佐だ」

俺達にお構いなくヘルフリートはそのまま話を続ける。

「主な任務とその他の情報については財団の連中から既に教わっている。貴様らは職員の話で既に知っているだろうがここにいるのは私とお前達とあの忌々しい陸戦隊共だけではない」

それに関しては確かに職員から話があった。

俺達はあくまで戦闘任務に駆り出される兵士だ。

ここにいる全員が世界各国から集められた戦闘機パイロットだというのもそれが理由だ。

俺達以外に搭乗しているDクラスは多分リーダー観測や火器の操作、無線通信に後は食堂やその他の雑用係だろう。

戦闘機に乗らずに安全な船内で働けるのだから羨ましい限りだ。

「皮肉な事に、元とはいえ軍人であるはずの我々はこんな状況で軍隊ごっこをせねばならんらしい」

淡々と話し続けるヘルフリート。

その顔には僅かに怒りが浮かび上がっているような気がした。

彼はきつと本当の軍人としての立場が欲しかったのだろう。

こんな仮初の肩書と権力を与えられて喜べる者などいない。

「私は艦長としての権限があるとはいえそれは財団の制御下にある……実質我々は財団の傀儡という訳だ」

もし、ヘルフリートやその他の誰かが財団の制御下を離れて独断で行動を始めればきつとこの船にいる数百人の陸戦隊全員を敵に回す事となる。

本当の敵はいつも背後にいる、ということらしい。

「……間も無く穴を抜ける。その後、貴様らから二人抜擢し、周辺の偵察飛行に向かわせる」

穴に入ってから既に十分以上は経過していたようだ。

入ったら早速そこに繋がっている訳では無いということか。

「穴を抜けるぞ、照明を消せ」

「は、はい」

照明が再び消え、束の間の暗闇がやってくる。

そして十秒としない間に穴を抜けたのか、窓の外に青空が見えた。

「おおーやつと抜けたぜー！」

高度が徐々に下がり、ヘッジホッグは雲の中を抜け、地上が見える高度まで降りた。

その地上の様子を見た全員が表情を驚愕に染めた。

「何がどうなってるんだ……」

「核戦争でも起きたのかよ？」

赤き荒野は地平線のずっと先まで広がっていた。

R o t t e n b o i l e d e g g

ここはヘッジホッグの中心部にある格納庫である。

合計60機もの航空機が格納されているこの場所で、俺達はこれから乗る事になる戦闘機を眼前にしていた。

「こんな戦闘機、見た事ないな」

自分の記憶の中にある全ての戦闘機と照らし合わせるが何れとも一致せず。恐らくは財団が独自に開発したものか。

機体形状はBF109とハリケーンを足して二で割ったような感じだ。

だが明らかに性能はそれらとは桁外れだろう。

翼面荷重は小さめ、速度性能を重視している。

エンジンは戦後に開発されたであろう大馬力の液冷エンジンを使用している。

ターボチャージャーも搭載しているようだ。

更に二重反転プロペラによってカウンタートルクを打ち消せるようになっていて。

主翼はハリケーンの頑丈さを受け継いだのか分厚くがっしりとした作りのなっている。

降着装置も特に問題は無さそうだ。

武装は20mが四門。

爆装も可能でヤーボとしての運用も視野に入れている。

「ただ、乗ったら少し前が見にくそうだな」

エンジンが大きいのとラジエーターの配置の所為でコックピットが大分後ろに下がってしまい、下方への視界はあまり良くない。

まあ、そこは経験でどうにかすればいいだろう。

「まさか初戦闘がレシプロ機で行く事になるとはなあ」

自分の乗機を眺めながらヘンリーが呟いた。

俺は第一飛行隊の隊長を任されていた。

そして俺が乗る隊長機は赤く塗りつぶされ、白色に塗られた他の僚機と区別がつきやすいように勝手にしてある。

「全く……赤く塗れば強くなるでも思っているのか？ 俺は赤い彗星なんかじゃないぞ」

文句を垂れながら今度は胴体側面と主翼に描かれたラウンデルに目を移した。

多分財団のシンボルマークを弄ったのだろうが、色々弄りすぎて何だか生物兵器を彷彿とさせる物騒なデザインになってしまっている。

「これじゃ空賊というより、闇の組織とでも名乗った方がしっくりくるな」
苦笑いしながらヘンリーは言った。

◆◆◆◆◆

場所は変わり、艦橋。

そこではレーダー観測員が突然声を上げ、ヘルフリート艦長の方を向いた。

「10時の方向より不明機！数は10機！高度5600より時速450kmで接近中！」

「早速来たか……」

席から立ち上がってヘルフリートはその手を振るい、声を上げる。

「第一飛行甲板のハッチを開けろ！第一飛行隊の発進準備急げ！」

ヘルフリートの指示を部下が通して船内の放送で伝える。

放送を聞いたパイロット達は飛行服に着替え、第一飛行甲板へと集結する。

飛行甲板には既に戦闘機が並べられており、後はエンジンを稼働させるだけだった。

緊張をする間も無くコックピットに乗り込み、操作を行う。

驚いた事にこの戦闘機の操作はいつも乗っていたジェット戦闘機とあまり変わりがなかった。

計器類は全て一つのタッチパネルに纏められ、大分簡略化されている。

初めての飛行なので不安だったが、思ったよりも簡単そうだった事に安堵した。タッチパネル右側のボタンを押し、セルモーターを回してエンジンを稼働させる。凄まじい轟音と共に二重反転プロペラが回転し、風を巻き起こす。

そしてそのまま発進の合図を待つ。

「初飛行が初戦闘か……出来れば避けたかったが……」

緊張を表す激しい動悸を押さえ込みつつ呟く。

僚機も全機発進準備が出来たらしく、プロペラを回転させたままその場に並んでいる。

そして誘導員が発進の合図を出し、隊長機に乗る俺が一番初めにスロットルレバーを押し込んだ。

「二番隊隊長、アルノフ、出る!!」

これは朝食に目玉焼きを食った直後の事だった。

レッドカラーとホワイトカラー

我々は世界の終焉を観測した。

そしてその先でさえも観測した。

滅びても尚、終わりを告げる事の無く時が進み続けるこの世界に、我々は生きている。

ここに居る者達は皆今年が1989年と言う。

新聞でもラジオでも同じだ。

だが、その1989年は一体いつから始まった？

ここに古代の遺跡や古代文明の存在を証明する物は一切無かった。

「……見よ、今回で730697回目の未知の恒星だ」

「いつも通りに朝が来たか……いや、厳密に言えばあの月のような惑星が消失した、か」

遙か先に見える太陽擬き。

我々も一時は太陽と推測していたが観測し、距離とサイズを計測して太陽では無い事

がハッキリと分かった。

太陽と比べるとアレはかなり大きい。

サイズで一番近いのはシリウス辺りだろうか。

距離は大分離れている為、地上から見た大きさは太陽と変わらない。そしてこの世界には更なる異常が存在した。

あくまでまだ推測だが、この世界は……平面世界であると言う事だ。

これは星の動きや、地平線の観測を行って出た結論だ。

平面世界なら、端が存在するのではと考え、調査を行った。

方法は単純、世界の端に辿り着くまでひたすら進み続けるという物だ。

その際に使用したのは一式陸攻。

素晴らしい航続距離を兼ね備えたこの機体で世界の端を目指して飛んだのだが、結局は失敗に終わった。

どこまで進んでも見えるのは荒野ばかり。

そもそもここが平面世界だとしてどれ程大きいのか、我々がどの辺りにいるのかも分からなかったので無謀とも言える調査だった。

だが、収穫がなかった訳ではない。

飛行中に例の空間領域の発生を確認したのだ。

それも我々の真上だ。

とは言っても空間領域の規模は大分小さく、すぐに消えてしまったのだが、驚くべきは調査を中断して帰った時だ。

その日は丁度空間領域が発生していて、自分はその間一式陸攻の整備を行っていたのだが、主翼の上に立っていると何故だかザラザラとした感触が足元からしたのだ。

何かと思つて見てみれば、そこには白い粉状の何かが付着していた。

粉は砂よりも細かく、小麦粉のようだった。

勿論我々は一式陸攻に小麦粉やその類の粉をぶちまけた覚えは無いので、念の為に採取して小瓶に入れて置いた。

その後一式陸攻の整備を終えて彼に粉を見せようとした。

空間領域はその時には既に消えていて観察を終えた彼は居間で寛いでいた。

そして小瓶に入った粉を見せようとしたのだが、小瓶に入っていたはずの粉は消えていた。

採取した粉の性質は特殊で、どうやら穴の発生した時にしか可視状態にならないらしい。

彼の推測に拠ればこの粉は空間領域を構成している物質の可能性があるとこの事。

調べれば調べる程、異常性の見つかるこの世界。

しかし、一つ我々の世界と共通する所があった。

それは……………。

『我々の世界に存在する物は、この世界にも存在している』



「こちら一番隊！敵編隊と交戦！機種は恐らくスピットファイア！」

雲の中を突き進みながら俺はコックピットの中で叫ぶ。

目の前にいるのは紛れもない敵機。

訓練の標的でもアグレッサー部隊でもない。

点灯した光学照準器の中心に敵機を置き、操縦桿の引き金に指を掛ける。

それを察知したのか敵のスピットファイアは左上方に旋回し、回避を図った。

こちらにも逃すまいと操縦桿を引き起こし、六時を取り続ける。

フラップも展開し、オーバーシユートを防ぎつつ射撃のタイミングを見計らっている

と、敵機がインメルマンターンを行おうとした。

その隙を逃さず、機首を上げ、照準器に敵機が収まる僅か数秒のタイミングで引き金

を引く。

両主翼の機関砲から放たれた薄殻榴弾が右主翼に喰らいつき、引き裂いた。

空中分解したスピットファイアを見下ろしていると、今度は後ろから敵が来た。

まだ体制が安定していない為、撃ってこない。

もうすぐ撃ってくる。

三、二、一、今。

飛んできた曳光弾を下方への旋回で躲す。

大丈夫だ、僚機がまだいる。

後ろを見ると敵機の更に後ろに僚機が着いてきているのが見えた。

ヘンリーの機体だ。

「ヘンリー、俺がコイツを釣り上げる！お前が墜とせ」

《了解！》

ヘンリーの返事を聞き、すぐに機首をを真上に上げる。

敵機もしつかりそれに釣られて急上昇する。

速度計の数字がどんどん減っていき、間もなく失速する速度まで下がった。

だがそれは敵機でも同じだ。

「今だ！やれ！」

《くたばりやがれ！》

失速していたスピットファイアは、ヘンリーの射撃を躲すことも出来ず、呆気なく蜂の巣にされ、火の玉と化して墜ちていった。

機体を水平に戻した俺は周囲を見るが、敵機は既にいなくなっていた。

見えるのは生還した9機の僚機だけだ。

「初戦闘は、損失無し……か」

《敵の全滅を確認、よくやった。
全機、RTB。
繰り返す、母艦へ帰還せよ》

開拓の残渣

このイジツに於いて、最近話題になる事が多い街、ラハマ。

話題というのはこの街そのものではなく、ラハマに住むとある用心棒達の事だった。

過去の戦闘で大いなる活躍を見せ、一気に頂点に上り詰めてみせた彼女等を皆こぶ。

コトブキ飛行隊と。

昼頃のラハマ。

賑わいを見せる街の中、人々はその場に立ち止まってある物を読んでいた。

新聞だ。

この世界ではラジオに次ぐ貴重な情報源である。

道行く人々の話題はその新聞の内容で持ち切りだった。

その新聞の見出しにはこう書かれていた。

『墜落した所属不明の飛行船、遂に調査を終了。ユーハングの再来か』

見出しの下には、墜落した飛行船の写真があった。

新聞に抛れば飛行船の搭乗員は全員死亡しており、残されていたのはグシャグシャにひしゃげた残骸と未知の戦闘機や兵器のパーツ、そして唯一焼かれなかった未知の言語で書かれた何枚かの文書。

しかし、言語の解読ができない為に何も分からずじまい。

ユーハングの言語はある程度解読が進んでおり、翻訳もできる。

飛行船から見つかった文書はそれとも一致しないのだ。

「にしても変だと思わない?」

酒場の一角にあるテーブルを囲む6人。

その内の一人である少女が新聞を捲りながら言った。

「確かに、所属も墜落した理由も不明。それにあのような飛行船が航行していたという記録も何も無い……変としか言いようが無いな」

「そもそも誰に殺られたのかも分からないのですからどうしようもありませんわ」

「どうせ空賊じゃないの?」

「その可能性は極めて低いと思われる。あの飛行船にあれ程の損傷を加えるには相当数の爆薬を必要とする。そして空賊はそれを揃えられるだけの財力は持ち合わせていない」

「損傷っていうか、あれは最早木っ端微塵だったけどね」

そう言いながら新聞を閉じ、テーブルに放る。

墜落した飛行船の調査に護衛として参加していた彼女等は今丁度帰って来た所だった。

これが彼女達……コトブキ飛行隊の日常である。

◆◆◆◆◆

《……あーあー、こちら一番隊一番機。聞こえるか、どうぞ》

「こちら管制室、感度良好。どうぞ」

《そちらから北北東の方角に集落らしき人工物の集団を発見。規模はそこまで大きくはない》

管制室にあるレーダースクリーンには三機の友軍機が現在表示されている。

それを見るDクラスのオペレーター、そして財団から派遣されたエージェント。

暫くして、アルノフの機体に搭載されたカメラから写真が送信されてきた。

アルノフの言った通りいくつかの建造物が見受けられる。

しかし人の姿は無い。

エージェントはその場所に心当たりがあつた。

「よし、偵察隊は帰していいよ」

「了解」

《こちら管制室、着艦を許可する》

「了解、着艦する」

目の前に浮かぶ母艦の飛行甲板のハッチが開いた事を確認し、そこを目指して緩降下しながらスロットルレバーを少しづつ絞って速度を落とす。

徐々に距離は縮み、速度が落ちる。

そして飛行甲板に突入し、コックピットに大きな振動が伝わる。

降着装置が地に着いた機体は速度を落としながらゆっくりと旋回し、滑走路脇のエプロンに停止させた。

風防を開き、主翼から新品のアスファルトの敷き詰められた甲板に飛び降りる。

長い間飛んでいた所為か、腰が痛む。

エプロンを歩きながら飛行甲板に目を移す。

既に二番機が降着装置を下ろした状態で着艦しようとしていた。

二番機、三番機の着艦が無事に終わった事を確認したアルノフは再び歩みを進める。

等間隔に並んだ機体からパイロットが降りて、荷物を片手に帰って行く。

アルノフは報告があるので兵舎のある上の階ではなく下の階へと降りる。

日はまだ真上と真横の境目、つまり多分11時位の方向にあった。

昼食には間に合うと思いつながらエレベーターで下の階へと行く。

この船はヘッジホッグではなく、ヘッジホッグに搭載されていた硬式飛行船である。

ヘッジホッグはその図体の大きさから現地住民を警戒させかねないというので船体

後部に格納されていた飛行船を出したのだ。

そしてこの船の船長はヘルフリードではない。

財団から派遣されたiというエージェントの男がこの船の実質的な指揮権を握って

いる。

なので報告もその人に行わなければならない。

無機質な灰色と銀色に支配された廊下を歩きながらその人のいるであろう部屋へと

向かう。

静寂に包まれた廊下にはアルノフの足音しか響かない。

他のパイロット達は皆上の階へと向かったのだろう。

しかし、いつも思う事だが財団はDクラスの扱いが杜撰過ぎやしないだろうか？

人格や腕前がどうであれ罪人を監視も無しに自由に歩き回らせるのはどう考えても

変だ。

あの陸戦隊も最初は警戒していたが特にこちらを見張ったり何かしら危害を加えるような事はして来なかった。

何故、何故だ。

本当に今のこの状況はDクラスの扱いとして正しいのか。

少しの間考え込んでいたアルノフだったが更なる異常に気付く。

「……そういえばこの仕事の時、事前の通知が来ていなかったな」

他のDクラスに聞いた話だが、何かしらの仕事が与えられる時は必ず遅くとも前日には事前通知と資料が与えられるそうだ。

しかし今回は何一つ来なかった。

それと他にも違和感があった。

迎えに来た警備員の声だ。

あの区域に来る警備員は毎回同じで声も覚えていたのだが、今回来たのは声が違った。

明らかに別人だった。

考えこんでいくうちにアルノフの脳内は更に混乱を引き起こす。

「一体何故だ………なんの意図が——」

「なにか悩み事でもあるのかなー？ アルノフくん」

「っ!？」

突然目の前から掛けられた声に慌てて床から前方に目を移すとそこには一人の男がいた。

にこやかな表情を浮かべながらからかうように言うこの男こそエージェント『i』である。

「エージェント『i』……」

「もー、こういう時は艦長って呼んでくれないと!」

「……では艦長、何故こちらに」

「いやいや、何故ってここ僕の部屋の前なんだけど」

そう言われてエージェントのすぐ隣にあった扉の上にあるネームプレートを見る。

そこには紛れも無く『艦長室』と書かれていた。

考え事をしている間に目的地に着いてしまったようだ。

「もしかして君ってどうでもいいことを深く考え込んだりやう癖があったりする?」

先程の自分の醜態を思い浮かべながら素直に答えた。

「……そうかも知れません」

「まっ、取り敢えずその格好で来たってことは報告だよな? さき、入って入って」

エージェントに背を押されながら艦長の扉を開けて中へと入っていく。

こんな変人もいるもんなんだな、
と思いつつながらアルノフは歩みを進めるのだった。